

<p>10/11-12 アニ玉祭 アニメ・まんがまつりin埼玉</p> <p>【主催】アニ玉祭実行委員会 【場所】大宮ソニックシティ アニメと観光をテーマに、県内を中心にアニメの聖地が大集合。 www.anitamasai.jp/</p>	<p>10/12・11/2 川口アート散歩 川口染織業の記憶をたどる「糸のみち」</p> <p>【主催】あなたとどこでもアート実行委員会 SMF (Saitama Muse Forum) 【場所】川口市 川口染織業の記憶をたどる「染のみち」と「織のみち」の2ツアー。 www.artplatform.jp/event2014/flier/itonomichi.pdf</p>	<p>10/18-19 第11回さいたま市みどりの祭典</p> <p>【主催】第11回さいたま市みどりの祭典実行委員会、さいたま市 【場所】市民の森・見沼グリーンセンター みどりに触れ、親しみ、楽しむ祭典。市内の緑、自然環境、農業関係の団体が多数参加。 www.city.saitama.jp/001/010/009/p037415.html</p>
<p>10/19 第四回本庄オープン古(フル)ハウス</p> <p>【主催】古ハウスオープナーズ 【場所】Cafe NINOKURA 古い建物「古ハウス」と「古い生活」を通して「これからの暮らし」を考える。 http://ninokura.web.fc2.com/open-o-house-all.html</p>	<p>10/25 2014ツール・ド・フランスさいたまクリテリウム</p> <p>【主催】ツール・ド・フランスさいたまクリテリウム実行委員会 【場所】さいたま新都心付近 欧州で絶大な人気を誇る自転車ロードレースのトップ選手がさいたま新都心に集結。 www.saitama-criterium.jp/</p>	<p>11/3 城下町岩槻鷹狩り行列</p> <p>【主催】城下町岩槻鷹狩り行列実行委員会 【場所】東武アーバンパークライン 岩槻駅付近 2013年に始まった新しいイベント。將軍の鷹狩り行列と、藩主の出迎え行列が見所。 www.takagari.jp/</p>
<p>11/1 上旬 ふなのづくり</p> <p>【主催】NPO法人見沼ファーム21 【場所】見沼たんぼ 伝統的なわらの保存方法である「ふなの」。2009年に約50年ぶりに復活。 www.minuma-farm21.com/</p>	<p>11/10 第10回さいたま百景巡回ツアー「見沼代用水西縁周辺をめぐる」</p> <p>【主催】さいたま百景選定市民委員会 【場所】さいたま市見沼たんぼ付近 さいたま市らしい風景を巡るツアー。見沼たんぼの西を流れる見沼代用水西縁を巡る。</p>	<p>11/25 ジオパーク秩父バスツアー2014</p> <p>【主催】NPO法人野外調査研究所 【場所】秩父地域 紅葉の奥秩父山地と荒川の自然と遺跡・風土にふれるツアー。 www.yagaiken.blog68.fc2.com/blog-entry-68.html</p>
<p>11/15-16 埼玉住まい・まちづくり交流展2014 in 越谷</p> <p>【主催】日本建築学会関東支部埼玉支所 NPO法人越谷市住まい・まちづくりセンター 【場所】越谷市市民活動支援センター 県内のまちづくりNPO、専門家、大学、企業などが集結。パネル展やシンポを開催。 www.koshi-machi.com/?p=1213</p>		

募集 都市づくりNPOさいたまは 正会員、賛助会員を募集しています。

●正会員(年会費10,000円)：当会の趣旨に従って事業に主体的に参画していただける個人の方で、法律上NPO法人の「社員」となります。年度一回の総会に出席して議決権を有します。

●賛助会員(年会費5,000円/口・年度を1口以上)：当会の趣旨に賛同し、資金的な支援をいただける個人または法人の方。法律上NPO法人の「社員」ではありませんが、当会から情報提供を受けられます。

募集 都市づくりNPOさいたま情報紙「つくたま」の発行に協賛を募集しています。

協賛金10,000円でこの欄に協賛いただいた方の記事(広告やイベント告知等)を掲載いたします。

各お申し込み・お問い合わせは下記「都市づくりNPOさいたま」まで

つくたまとは？ | つくたまは、都市づくりNPOさいたまの愛称です。つくたまは、市民のまちづくりへの参加を支援し、まちづくりの新たな価値の提案や、具体的まちづくり活動を実践して、市民がまちづくりの中心にある社会を目指す特定非営利活動法人です。

つくたまの主な活動

<p>調査及び研究事業 見沼田圃景観創造プロジェクト/高沼用水の整備に関する検討/つくたま塾の開催/さいたま百景選定事業/つくたま10周年記念事業/埼玉県景観整備機構活動(景観DBの活用を含む)/上尾市画区画整理公園実施設計業務</p> <p>情報発信事業 Webサイト、FBの運用/埼玉住まい・まちづくり交流展2013/Who's Who/つくたま情報紙の発行</p> <p>普及、人材育成事業 研修旅行/講師派遣</p>	<p>コーディネート、ファシリテート事業 氷川の杜まちづくり協議会/JR環境空間「河童の森づくり」に関する支援/さいたま・まちプラン市民会議2013~2014/見沼区民会議活動支援業務/中央区区民会議活動支援業務/アートフルゆめまつり事務局支援/さいたまカーフリーデー2014/大宮の街づくりを盛り上げるシンポジウム企画実施</p> <p>市民活動支援事業 天沼住宅地区計画検討支援/浦和常盤8丁目地区計画検討支援/さいたま市民自治フォーラム</p> <p>その他の事業 さいたま市福祉のまちづくり推進協議会/さいたま市地域包括支援センター運営協議会/さいたま市都市計画マスタープラン改定調査委員会/埼玉県景観審議会/つくたまアクションプランの検討</p>
---	---

●編集・発行/2014年10月(通算第3号) ●デザイン・編集協力/藤巻 武士、松尾 英香

特定非営利活動法人 都市づくりNPOさいたま

〒336-0917 埼玉県さいたま市緑区芝原2-16-21 (地域生活デザイン内)
tel & fax : 048-876-1782 e-mail : jimu@tsukutama.info
<http://www.tsukutama.info>

つくたま

都市づくりNPOさいたまは…
市民のまちづくりへの参加を支援し
まちづくりの新たな価値を提案し
具体的まちづくり活動を実践して
市民がまちづくりの中心にある社会を目指します。

vol.03
October.2014



特集 P.2 まちづくりとアートとの関係 ~さいたま市、今後への期待

[今号の表紙]

さいたま新都心は、国の機関の移転整備や民間企業誘致、さいたまスーパーアリーナなど集客施設を備える新しい街で、2000年5月5日に「街開き」が行われた。

“パブリックアート”が積極的に取り入れられ、街のあちこちに現代彫刻が点在している。写真は「モーレソースの丘」(三梨伸)。歩行者空間と植栽空間を区切る設えを兼ねている。

つくたまの人々	P.6
中村 誠 さん [SMF事務局 埼玉県立近代美術館主席学芸主幹]	
まちづくりNPO紹介	P.7
アートフルゆめまつり実行委員会	
インフォメーション	P.8

まちづくりとアートとの関係 ～さいたま市、今後への期待



写真1(上):ヒアシンスハウス 写真2(下):アートフルゆめまつりのパレード

■まちづくりとアートの関係概観

まちづくりとアートの関係を概観すると、見開き表のようなくつもの流れでとらえることができるだろう。

①まちづくりとアートの邂逅

近代以降まちに表れるアートの姿としては、戦前までは為政者による権威の象徴としてのアートの役割が見て取れる。例えば偉人の銅像や肖像であり、モニュメンタルで様式的な公建築などである。それらはアートの力を借りて、高尚で畏れおおいもの、敬意を持って接するものとしての意味性をまもっていた。

敗戦を機に、まちなかで権威の象徴としてのアート役割が後退した後、再びまちづくりのなかでアートに光が当てられるのは、高度経済成長期以降である。それは、急激な開発や過疎の進行など、全国で都市と地方が一斉に変容していくなかで、アートの力をまちづくりに活かそうとする様々な取り組みとなって表れてくる。

①-1彫刻のあるまちづくり事業～パブリックアートの設置

「彫刻のあるまちづくり事業」は、1960年代に山口県宇部市が先駆けとなり全国の自治体に広がりを見せた。宇

部市は、当時「降灰量日本一」とされた公害対策のために、都市緑化に積極的に取り組む必要があった。そして、都市緑化をより効果的に演出する要素として「彫刻」に着眼し、彫刻展(コンペティション)を定期的で開催することによって、市内に設置する彫刻コレクションを計画的に充実させていった。

宇部市の取り組みは「彫刻のあるまちづくり事業」として手法化され、神戸市では文化行政として須磨離宮公園現代彫刻展を開催し、芸術文化の観賞の場づくりが進められた。こうして「彫刻のあるまちづくり事業」は、文化行政のあり方の一つとして、行政による彫刻の発注調達とパブリックな空間への設置という道を開いたのである。これはやがて、駅前や公共施設エントランスに裸の人物彫刻があるのが当たり前の風景につながっていく。

彫刻とまちづくりの関係に一つの転機をもたらしたのは、1994年の「ファーレ立川」だろう。住宅・都市整備公団(現:都市再生機構)によるJR立川駅北口の米軍基地跡地の再開発事業エリアに、100点以上のパブリックアート(現代彫刻)が設置された。分かりやすい具象彫刻から離

まちづくりとアートの関係概観

	戦前	～1980年代	1990年代					2000年代					2010年代																
			'90	'91	'92	'93	'94	'95	'96	'97	'98	'99	'00	'01	'02	'03	'04	'05	'06	'07	'08	'09	'10	'11	'12	'13	'14	'15	'16
全国的先駆的取組・アートとまちづくりを巡る動向	為政者による権威の象徴 ●偉人の銅像、肖像 ●モニュメンタルな公建築	行政による「彫刻のあるまちづくり事業」(1960年代～) ●宇部市野外彫刻展→UBEビエンナーレ('61～) ●第1回神戸市須磨離宮公園現代彫刻展('68)	再開発を契機としたパブリック					アート設置「彫刻のあるまちづくり」から、「彫刻によるまちづくり」への変容																					
	ヴァナキュラー建築群や地場産業の集積などによる特徴ある街並み形成	大規模公園とアート ●札幌芸術の森('86) ●モエレ沼公園('88～イサムノグチの参加) 地域発国際芸術祭(単一テーマ型、拠点型→地域課題発見型、住民参加型へ) ●利賀フェスティバル('82～) ●牛窓国際芸術祭('84～'92) ●山形国際ドキュメンタリー映画祭('89～)	●養老天命反転地('95)					●大地の芸術祭越後妻有トリエンナーレ('00～) ●横浜トリエンナーレ('01～)					●瀬戸内国際芸術祭('10～)																
	都市開発や国土均質化の流れから生じる歴史的街並み再評価の動き→観光資源、活性化対策としての街並み保全・再生→都市間競争、地域ブランド力強化の視点	●1960年代～日本版ナショナルトラスト運動 ●倉敷アイビースクエア('74) ●谷根千('84～) ●1990年代～日本版グランドワーク運動 ●小布施街並み修景事業('86) 都市デザイン→ウォーターフロント開発→地域景観資源活用→街なか再生→まちづくり会社、タウンマネジメント、エリアマネジメント ●横浜市都市デザイン室開設('71) ●株式会社黒壁、くまもとアートポリス事業('88～) アートとまちづくりを結ぶ仕組みの変遷 ●企業メセナ元年('88)→市民団体によるアートプロジェクトの隆盛 ●まちづくりワークショップ→まちづくりデザインゲーム											●アーバンデザインセンター柏の葉('06)																
浦和に画家のアトリエ集まる	●埼玉会館('66)	●ソニックシティホール('88)	●彩の国さいたま芸術劇場('94)					●ヒアシンスハウス('04)					●さいたまトリエンナーレ('16～)																
さいたまにおける取組・アートとまちづくりを巡る動向			●大宮市民吹奏楽団('93) ●浦和市民吹奏楽団('94)					●さいたま新都心パブリックアート('00)					●さいたま美術展創発プロジェクト('08～)																
盆栽村の形成 岩槻に人形産業が根づく		●大宮野外彫刻展('84～'87)	●大宮市景観賞→さいたま市の通り道展('95)					●大宮市民吹奏楽団('94) 景観賞('94～'10)					●さいたま市文化芸術都市創造条例制定('11) ●各区ごとのアートイベント盛んになる('12～)																
社会の動き	高度経済成長 ●古都保存法('66)	バブル景気 ●伝統的建造物群保存地区制度('75)	バブル崩壊→失われた20年 ●阪神淡路大震災('95) ●登録文化財					●NPO法制定('98) 制度('96)					●東日本大震災('11) ●歴史まちづくり法('08)																
			●岩槻まちかど鑑めぐり('04～)					●浦和・与野・大宮3市合併('01)→岩槻編入('05)																					

れ、抽象彫刻やストリートファニチャーなど都市機能と融合する作品が採用され、まちづくりの一部としてのパブリックアートのあり方が提示された。従来は、作品としての彫刻が先にあったのだが、ファーレ立川では、まちと彫刻が呼応する関係性が模索されたといえる。

①-2 大規模公園とアート

1960年代～1970年代にかけて、海外の現代彫刻の世界では、商業主義的に流通消費される彫刻作品のありようへの反発から、インスタレーションなどの時限的表現を含むランド・アート、環境彫刻のムーブメントが巻き起こる。皮肉にも日本では、主にバブル期のリゾート開発や大規模公共事業にその表現の場を得ていく。なかでも大規模公園でランド・アートが積極的に取り入れられた事例では、モエレ沼公園（イサムノグチ）や養老天命反天地（荒川修作）があげられる。



札幌国際芸術祭2014の会場ともなったモエレ沼公園

①-3 地域発国際芸術祭

宇部市で1960年代に始まり現在の「UBEビエンナーレ」に続く現代彫刻展は、地域（地方）発の国際芸術祭の先駆けでもある。地域で独自の視点をもつ国際的な芸術祭を催す動きは、1980年代に新たな盛り上がりを見せる。野外劇場を舞台とする国際演劇祭「利賀フェスティバル」、のちの瀬戸内国際芸術祭の源流ともいえる「牛窓国際芸術祭」、「山形国際ドキュメンタリー映画祭」など、多くの興味深い試みがこの時期に生まれている。そのような個々の単一テーマ型、拠点型の国際芸術祭は、広域を会場とし地域全体をアート化するかのような、「大地の芸術祭越後妻有トリエンナーレ」やその後の事例へと発展していく。

当初、世界から第一級の芸術を招来し拝観する趣の芸術祭であったが、やがて、アーティスト・イン・レジデンスや住民参加型プログラムなどにより、地域課題の発見や地域資源の再定義などを通じてまちづくりに直接働きかける、壮大なプロジェクトへと発展してきた。そのような国

際芸術祭の意味の変容は都市部での開催にも見られ、「横浜トリエンナーレ」や「あいちトリエンナーレ」などでは、中心市街地の様々な課題のアートによる可視化や、アートプロジェクトによる課題へのアプローチ提案などが内包されている。



ヨコハマトリエンナーレ2014の初黄・日ノ出町地区会場のレジデンス&スタジオ

② アートかデザインか～街並みと都市デザイン

これまで見てきた芸術・美術の流れから視点を移し、街並みや都市デザインなどに係る流れを見てみよう。

そもそも日本の街並みは、地理的条件による秩序（土地のこことわり）に規定され、自然に逆らうことなく形成・成熟するなかから、日本人の価値観と不可分な「美」を備えてきた。

戦後の高度経済成長期に、地理的条件を解体するような都市開発や国土均質化の流れへのアンチテーゼとして、歴史的街並みを再評価し保全・活用しようという動きが生まれる。他方、拡大膨張する都市では、開発・再開発を計画的にコントロールする価値軸として都市デザインの概念が登場する。

②-1 街並み保全・再生

街並み保全・再生の主たる目的は、観光資源開発、地域活性化対策であり、都市間競争を勝ち抜く地域ブランド力強化のまちづくり。アートや文化はそのための手段とされたと言ってもよいだろう。地域独自の街並みや文化を維持継承するにはコミュニティが必要であり、衰退するコミュニティ支援や活性化の手段としてアートや文化が語られることも多い。いずれにしても、地域課題、都市づくりの課題解決の手段として、アートや文化が取り扱われている。しかし本来「芸術」という行為は目的であって手段ではない。課題解決のための計画的行為（営み）は、「デザイン」と呼ぶのが相応しい。従って、街並み保全・再生は、都市デザインの文脈で読み解くべきだろう。

②-2 都市デザイン～エリアマネジメント

横浜市が都市デザイン室を設置したのが1971年のことである。都市の新規開発と再開発が相半ばする時代において、都市整備の方向性を決定づけるために、都市デザインは重要な戦略的指標となった。地方でも様々な実践がある。滋賀県長浜市では、旧北国街道筋に形成された市街地で、老朽化した歴史的建築物をリノベーションしてソフト活用を図る「まちづくり会社」が生まれる。熊本県では「くまもとアートポリス事業」と呼ばれる公共建築物整備が展開する。マスターアーキテクトを指名し、継続的に文化性の高い建築物のストック形成を図る公共政策であった。

地方都市の衰退、中心市街地の空洞化など、バブル期以降顕在化してきた問題に加え、近年では人口減少社会への転換によって、大都市周辺においてもタウンマネジメント、エリアマネジメントが重視され、都市デザインの重要性の本質は色あせていない。

③ アートとまちづくりを結ぶ仕組みの変遷

NPO法制定以降、各地にアートNPOが立ち上がっている。その中には、単なる趣味や生涯学習の興味関心を超えて、何らかの地域課題を抱える「場所」に特化し、課題へのアプローチを試みるものも少なくない。また、都市施設の老朽化や経済の停滞・縮小に伴う余剰対策としてリノベーションでアートセンターを整備して、アートNPOに拠点として活用される事例も増えている。

“芸術”が有する課題を可視化し社会に提起する力と、“デザイン”の計画的に課題解決に向かう力を融合させた“アートプロジェクト”を継続的に引き起こし、まちづくりに市民の参加とアーティストとの協働を仕掛ける装置として、アートNPOおよびアートセンターの役割が目ざされている。

■さいたま市エリアの動向

ここまで、まちづくりとアートの関係を概観してきたが、さいたま市エリアでは、そのような全国的な流れに対して、目立って呼応するような動きはなかったといえる。

戦前の浦和は「鎌倉文士に浦和画家」と呼ばれるように画家のアトリエ（住宅）が集まっていたし、大宮では盆栽師が盆栽村を形成し、岩槻には人形産業が根づいていた。それらは、今でもさいたま市エリアの文化的土壌となっていることは間違いない。しかし、戦後のさいたま市エリアのまちづくりの中でとらえられるアートのトピックスは、美術館や音楽ホールなどのハコモノ整備や都市景観賞の

創設といった文化行政の他、「大宮野外彫刻展（'84～'87）」などの散発的なアートイベントに留まり、継続的にアートとまちづくりが関係を結んできたとはいえない。

しかし、近年になり、夭逝した詩人の夢のアトリエ建築を別所沼の畔に実現させた「ヒアシンスハウス（'04）」、中心市街地の資源を活かし人をつなぐ「岩槻まちかど雛めぐり（'04～）」や大宮の「アートフルゆめまつり（'08～）」のような街なかアートイベントの継続開催など、市民発意のアートプロジェクトに盛り上がりが見られ、まちづくりにアートを取り入れようとする機運の高まりが感じられる。

そして、さいたま市は2011年に「文化芸術都市創造条例」を制定した。“文化芸術振興”ではなく“文化芸術都市創造”と名付けたところに、まちづくりにアートを取り入れていこうとする決意が読み取れるのではなかろうか。



うらわアートフェスティバル2012
～JR高架下壁面を活用したライブペインティングの様子

■さいたま市、今後への期待

“文化芸術都市創造”の核となるプロジェクトとして、2016年に「さいたまトリエンナーレ」開催が決定した。既にその開催実現に向けて準備が始まっているが、先行する他の国際芸術祭のまねごとではなく、さいたまのまちづくり課題、地域課題、市民活動からわき上がるテーマ性を、アートでつなぎ可視化するような芸術祭であってほしい。老朽化した公共施設の計画的マネジメントや、停滞する中心市街地の更新、人口縮小に向かう社会情勢を受けた郊外住宅地のありようなど、山積する都市づくり課題に対して、“アート”の力を活かして鋭く切り込んでもらいたい。

3年に一度の継続開催の中で、アートとまちづくりが常に緊張感ある関係を結び、よりよいさいたま市の実現につながるよう、我々も主体的に参画していきたいと考えている。

【文責：三浦匡史】



つくたま 人々

中村 誠さん [SMF事務局 埼玉県立近代美術館主席学芸主幹]

3

【経歴】

1982年より埼玉県立近代美術館学芸員。主な展覧会に「インド部族芸術展」、「火の起源と神話」、「ジェームズ・タレル展」、「印象派とその時代」、「田園讃歌」展など。埼玉大学、日本大学非常勤講師。近年はアートNPO設立支援や、ヒアンスハウスの会、SMFなど、ミュージアムをキーステーションにアートでひととまちを結ぶ活動を継続中。

アートと都市の大きな関係を考える

都市空間とアート関係のはじまりには戦後の「彫刻のあるまちづくり」運動があげられます。1961年に開催した「宇部市野外彫刻展」や68年から神戸須磨離宮公園で始まった「現代彫刻展」が全国に大きな影響を与えました。1990年代からは、日本でも「パブリックアート」という言葉がよく聞かれるようになり、「ファーレ立川」や「ミュージアムシティ天神」も先駆的な試みでした。

埼玉県内ではヒアンスハウスの建設に集まった芸術家たちから現在の芽が出てきた

1950年代から60年代に中野四郎という彫刻家が新素材によるセメント彫刻をまちのなかという運動を進め、今もさいたま市内の公園等にその名残が見られます。東北新幹線の通る前後にわたって、「大宮野外彫刻展」が開かれました。アーティストがまち空間と対話し表現を試みたい早い例のひとつとして、近代美術館が企画協力して大宮駅周辺市街地で開催した「ゆう・もあ・あーと 風の通り道」展(1995年)があげられます。

2003年ころ、さいたま市の誕生に際して、詩人で建築家の立原道造が夢見た週末別荘を別所沼公園内に建築しようとい

ろいろなジャンルの芸術家たちが集まり「ヒアンスハウスをつくる会」が結成されました。建築は2004年11月に完成しました。

SMFの結成と活動

こうした経験を活かして2008年から、SMF(Saitama Muse Forum)の活動に取り組んでいます。(http://artplatform.jp参照)美術館に求められる役割も時代とともに変化してきました。埼玉県立近代美術館では2006年に新たなミッションを策定しました。「美術と出会い、新たな考え方や価値を発見するための体験を提供します」、「人々が集い、参加し、交流するための基地となります」などの4つの柱とするものです。

SMFは、ミッションに賛同するさまざまなジャンルの方々で構成されています。県内の5つの公立ミュージアムがゆるやかに連携し、SMFが企画運営のエンジンとなり、文化庁の助成をいただきながら、2008年には1本1本手づくりされた2000本もの美しい風車が立ち並び、県内各地で見事な風の華を咲かせました。

SMFはネットワークではなく、プラットフォームをめざす

SMFは昨年、近美に事務局を置く会員制の会として再出発しました。今年度は「あ

なたと どこでも アート/小さな家プロジェクト」が助成事業に採択されました。「旅する小さな家」のコンペを行い、最優秀案を元に実際に小さな家をつくり巡回させるプロジェクトを中心に、商店街との地域連携プログラム等も含めて、県内各地で20を超える事業を実施します。

またウェブ上に「アートに関心があるあらゆる人々の集合住宅」として「SMFアート長屋」(仮称)を構想・準備中です。SMFがめざすのは、刻々と変化するにぎやかな交差点、多種多様な人たちがアイデアやエネルギーを共有し交換するプラットフォームです。

【レポート：若林祥文】

メッセージ

さいたまのまちづくりひとづくりに10年以上にわたって着実な貢献を続けてこられた「つくたま」のみなさまに心から敬意を表します。さいたまトリエンナーレ、さらに東京五輪に関連した芸術文化施策の展開など、一過性のお祭りではなく、さいたま市ならではの地に足のついた有効な事業となるよう願っています。



2009年11月23日北浦和公園に立ち並んだ風車(アーティスト:根岸和弘)



2014年7月13日「旅する小さな家」公開審査風景(全国から200点余の応募)

まちづくりNPO紹介 ③



アートフルゆめまつり 実行委員会

【設立】2007年	【法人形態】任意団体
【代表】久世晴雅さん	
【会員数】役員13名。事務局8名(役員と重複有) 参加団体から1名ずつ実行委員に参加(2014は136団体)	
【住所】さいたま市大宮区大門町3-205 ABCビル302	
【TEL】048-795-9048	【E-mail】info@aymo.jp
【URL】http://www.aymo.jp	

会の設立と活動の趣旨

「みんなが作り手、みんなが主役」アートフルゆめまつりの合い言葉です。毎年150団体ほどの参加団体から1名以上ずつが実行委員になって、一堂に会します。事前の準備、広報、協賛あつめ、イベント当日も10数カ所ある会場で受付から進行まで、運営の全てを参加者が役割分担して進めます。全国に数多ありながら、さいたまではまだ行われてなかったアートフェス。市民が自ら創る「まちづくり」の理想をそのまま体現しながら、さいたまでそれをやろう!アートフルゆめまつりは、音楽やアートの社会参加です。私たちの音楽や

アートが、まちの一部になる。そんな時が来ることを夢見ています。2008年に始まったアートフルゆめまつりの源流は、1993年に桜木中学校吹奏楽部と桜木公民館がタッグを組んで始めた「せせらぎコンサート」にあります。現在はせせらぎコンサート市民企画委員会が運営。2006年、2007年に音楽・NPO・まちづくりをテーマとしたセミナーを開催し、そこで生まれたアイデアを実現するために有志が結集。さいたま市民提案型協働モデル事業を射止め、同2007年にアートフルゆめまつり実行委員会が発足しました。

これまでの実績や主な成果

2012年からは4月下旬にアートフルゆめまつりを開催しています。今年4月20日(日)で7回目。まちの中に11~13会場のステージ・展示場所を設け、約150団体、1000人を超える参加で大宮のまちににぎわいを届けています。当初から大宮区の協力と、たくさんの個人・企業から協賛を得て開催することができています。役員が推進役となり、年々事務局機能を高めています。たくさんの人を知って、楽しみ、協力してもらうために、2013年からプログラム10万部を新聞折り込みで事前に配布するようになりました。

しかしなんと言っても「みんなが作り手、みんなが主役」を実現していることが、私たち最大の実績です。各会場が参加者の自主運営でまわっていくまつり当日も素晴らしいですが、準備のために毎年

200名以上が集まり、会場ごとの役割分担や当日の運営・進行を話し合う「実行委員会」の風景はまさに圧巻で、これこそ「大宮のキセキ」だと私たちは考えています。また、まちと一体になっていけるように、まつり開催の約1ヶ月前に、開催への協力を呼びかけてまちじゅうを挨拶してまわる「行脚」を行っています。年々、アートフルゆめまつりへの理解、認知が高まっていると感じています。



今後の課題や方針

大宮を訪れるお客さんの数を10万の単位で数えられるおまつりに成長したいです。同時にイベントを開催していただけるお店・団体や、まちを活性化する企画をしてくださる企業も現れています。見て、聴いて楽しむおまつりは実現していますが、食べて、飲んで、買って楽しめるおまつりはまだまだこれからです。新たな協賛や、タイアップ企画を開発していくなど、もっともこの輪をひろげて行かねば!と考えています。

さいたま市が2016年に「さいたまトリエンナーレ」を開催すると

言っています。これにも大宮で先行する市民が創るアートフェスとして、みんなで取り組んでいきたいです。

私たちは大宮のまちを使って遊んできました。もっとまちを遊び倒したい!まちが公共施設から変わっていくとしています。まちなかもどんどん変化していくはず。その変化も楽しみたい。「まちづくり」を指向しながら、私たちは同時に「まちづかい」をしてきました。見えてきたテーマは、「まちをつかい、まちをあそぶ」。「まちづかい」を仕事にする会社が出来ないか...夢は広がります!!【出口朱輝】